

『児玉三夫対談集 教育の源流を求めて』

対談の内容：「リーन्हルトとゲルトルート
— J. H. ペスタロッチのロマンをめぐって —」

対談者：児玉三夫（明星大学）

田尾一一（明星大学教授・『リーन्हルトとゲルトルート』の翻訳者）

はじめに

児玉 今日、本学でドイツ語とドイツ文学史の教鞭をとっておられる田尾先生から、一八世紀から一九世紀にかけて活躍したスイスの教育者ペスタロッチの著作を中心にお話を伺う機会を得ることができました。

田尾先生はペスタロッチの主著中の主著といわれる『リーन्हルトとゲルトルート』をすばらしい文章で完訳なさっておられますので、こうした機会にペスタロッチの教育理念、翻訳のことなど——私も、長年ペスタロッチを研究のテーマにしてまいりました関係上——直接先生からお話を伺えることを大変楽しみにいたしております。

さて、ペスタロッチの名はよく知られておりますが、彼の著書『リーन्हルトとゲルトルート』については私から少し説明を加えておいた方がよかろうかと存じます。ペスタロッチの研究者、モルフ^(*1)なども言うように、この著書は彼の生涯を通じて最も情熱を傾けた作品で、彼の教育上の信仰の告白ともいえるべき『隠者の夕暮』（一七八〇年）を完成した翌年、その理念をもとに書かれました。ペスタロッチは第一巻を著わした後、六年にわたり第四巻まで公刊しました。さらに——残念なことに未完に終わりましたが——第五巻、六巻と、彼は死ぬまでその構想をねり続けたといわれます。価値ある内容に比してあまり評価を受けなかった彼の著作活動の中で、この『リーन्हルトとゲルトルート』だけは例外的に全ヨーロッパで愛読され、ルソーの『エミール』^(*2)に匹敵する「民衆小説」(Der Volksroman)と言われている。

そしてこの本は、ペスタロッチのあらゆる方面、特に教育、政治、法律、宗教道徳、社会に亘る思想の集約が文学的・芸術的に小説という形態をとって表現されていますので、これを翻訳するには、多面に亘る彼の思想を十分に理解し、しかも彼の芸術的感性を把握することができなければなりません。その観点からしますと、田尾先生はそのご資質、ご造詣、ご経歴など、『リーन्हルトとゲルトルート』の翻訳にあたられますのに最も相応しい方であると、私は確信しております。

教育的ヒューマニズムは、ペスタロッチを通して、各国の教育者に受けつがれてきました。さらにその教授法の探求は近代教育に大きな影響を与えております。本学には教育研究を目的とする学科もごございますが、その学科に止まりませんで、この対談が多くの学生諸君にとって、彼の教育精神を理解する何らかの契機とならんことをひそかに念じております。

ペスタロッチとの出会い — 日本における初期の研究から —

児玉 田尾先生は、先に述べましたペスタロッチの教育研究と実践に大変深い関心を持ち、それに長年情熱を傾けてこられました。まず、先生がお若い時から日本におけるペスタロッチ教育研究に携わってこられたことについて、そのきっかけなどからお伺いしたいのですが。

田尾一一 だいぶ昔の話になるんですが……大正の初め、日本の教育を刷新するために、沢柳先生が、小西^(*)3)、長田^(*)4) 両先生をおつれになって、欧米の教育事情を視察に行かれました。当時、アメリカのニューヨーク州オスウェーゴの師範学校では、ペスタロッチの教育精神に基づいた教育方法の研究をしておりまして、それがいわゆるオスウェーゴ運動となっていたのです。それらをご視察された沢柳先生は、帰国なさってから、その教育精神による実験学校である成城学園^(*)5) を創立され、ご自身がそこの初代校長に就任されました。これが日本におけるペスタロッチ教育研究とその運動のはじめとなるでしょう。

児玉 その後、成城学園はH・パーカー女史（アメリカの教育学者）のドルトン・プラン^(*)6) を移入しました。しかしそれは本質的にはオスウェーゴ運動^(*)7) と深い係わりを持つものですね。

田尾 関係は深いと思います。つまりドルトン・プランの性質—子供を集めて、家庭的環境のもとで自学自習するというやり方—は、ペスタロッチの教育理念と根本的に相通ずるものがありますね。したがって、成城学園におけるドルトン・プランのとり入れは日本におけるペスタロッチ運動の一つの波であるといえましょう。

児玉 本学には落合教授や近藤一二教授など、創立当初の成城学園でドルトン・プランによって教育をなさった先生方がおられます。日本における教育の生きた歴史、貴重な体験をお持ちの先生方です。

ドイツ文学との出会い — 阿部次郎の影響から —

児玉 ペスタロッチの日本への導入がありまして、それらを基礎に、先生が実際にペスタロッチをお知りになったのは、広島高等師範（現在の広島大学）の学生でおられた頃になりますでしょうか。次にその出会いから、ペスタロッチのロマン『リーンハルトとゲルトルート』を完訳なされるまでのいきさつをお聞かせいただけますでしょうか。

田尾 ちょうど大正九年の頃、私が広島高等師範にいた頃ですが、長田先生と福島^(*)8) 先生という、日本におけるペスタロッチ研究の第一人者の先生方がこられました。両先生は後に高等師範に、日本ではじめてのペスタロッチ研究室をお作りなされた先生ですが、これが日本における本格的なペスタロッチ研究の始まりといえましょう。

児玉 そうしますと、先生は日本で最初に『リーンハルトとゲルトルート』をお訳しになった人をご存知ですか。

田尾 これは福島先生から聞いたのですが、高岑^(ママ) 秀夫（師範教育の開拓者）^(*)9) 氏が明治二十年頃アメリカに行き、そこから『リーンハルトとゲルトルート』を伝えたといわれています。多分、英訳本から訳したのではないかと思います。しかし私はそう聞いただけで、まだ実物はみてはおりませんが……。

児玉 そうですか。

ところで、この『リーンハルトとゲルトルート』は単なる教育論でも民衆小説でもなくて、我われの心に常に訴えずにはおかないほどの偉大な教育の一大ロマンでもあると思いますが——それだけに、教育と文学に対する深い理解力と、芸術的感性が訳者に要求されると思います。私は田尾先生こそ、この本をお訳しになる最適者だったと思っておりますが、そういう観点からも、先生のご経歴を少し詳しくお話いただけますでしょうか。

田尾 先程申しましたように、私は最初、広島の高師におりました。当時の高師では、教科の半ばが教育学に関するものでして、教育学についてかなり勉強するようになりました。また長田先生などの影響もあって、いつしかペスタロッチを知るようになったわけです。

一方、その頃の学生に一番読まれた本は、阿部次郎の『三太郎の日記』^(*)10) でした。倫理学の先生であった西晋一郎^(*)11) 先生は、阿部先生の先輩でしてね、我われに『三太郎の日記』を読むことを盛んに勧められたのです。それで私もこの本を熟読しまして、大変感銘を受けました。そんなことがきっかけとなりまして後に阿部先生のおられる東北大学へ行ったわけです。

東北大学では、当時最も尊重されたデイルタイ^(*)12) の哲学なども読みました。

児玉 阿部先生は、その頃何を講義なさっていたのですか。

田尾 美学です。ところがこの美学をやるには、ドイツ語がよく読めなければだめなのです。そこで、ドイツ語を本格的に勉強するために、独文学科に転科したのですが、それがそのまま独文科を卒業することになってしまいました。

児玉 先生は現在、明星大学でドイツ語とドイツ文学を講義なさっておられますが、本学に来られる前、東京芸術大学ご在任の頃は教育学を講義なさっておられました。それは先生のそのようなご経歴があったからなのですね。

ロマンとしての意味 — 母性愛は教育愛の神髄 —

児玉 ところで、先生は『リーन्हルトとゲルトルート』をお訳しになるのに、ザイファルト（ペスタロッチ全集として定評のある版の編集者）の編集した版をご使用になっておられますが、これについて少しお聞かせいただけますか。

田尾 先程、申しましたように、長田、福島両先生が高等師範にペスタロッチ研究室をおつくりになり、そこで貴重な研究を始められたわけですが、その成果の一つとして、ペスタロッチ全集の邦訳が計画されましたね。それをイデア書院（玉川大学出版部の前身）から出版することになり、小原先生（玉川学園・玉川大学創立者）がお引き受けになったのです。結局、これは全集にいたらず、選集になってしまいました。その時、長田先生のご意見で、ザイファルトが選ばれたのでしょうか。結局、私がそれを受けついで訳したわけです。

児玉 私もザイファルト版（十二巻）をきわめて優れたものとして評価しております。その後、先生は玉川大学の『教育宝典』の中で、『リーन्हルトとゲルトルート』を担当され、日本で初めてとってよい完訳をなさったわけですが、私、この本は文学的にみても大変なものではないかと常日頃思っております。この本に表わされている母性愛とその実践こそ教育愛の神髄だと思います。私はこの愛の表現のためにペスタロッチが“ロマン”という形式をとったのではないかと考えているのですが。

田尾 デイルタイによりますと、ペスタロッチの教育精神は次のように受け継がれていったことになりましょう。つまり、ペスタロッチから発したものとして、ドイツにおける普通教育制度の拡充がありますが、それにはまたフンボルト（プロシャの文部大臣）の力があつたわけです。

しかしながら、ペスタロッチの教育精神は——これがもっと大切なものですが——フレーベル（幼児教育思想家）、ヘルバルト（ドイツの哲学者・教育学者）等にも受け継がれています。

このことを考えますと、フンボルト^(*13)がペスタロッチの教育理念に沿って、普通教育制度に力をつくしたのは、ペスタロッチの基礎教育論を受けるものだと思います。この基礎教育論は、いろいろなペスタロッチの著作に述べられていますが、『リーन्हルトとゲルトルート』の中でのゲルトルートの動き方、すなわち、子どもに接し、彼らを教育していく仕方に特に表われております。また、フレーベルやヘルバルトに受け継がれていった教育精神も、やはり、ゲルトルートの動きによく表われている。それで、今、児玉先生がおっしゃいましたように、母性愛が教育愛の神髄であるとする——それを具体的に、理論的に把握することは容易なことではありません。そうしますと、むしろそれは文学的に表現した方がいいわけで、ペスタロッチは“ロマン”の形式をとったのでしょうか。

他のこともまだありますが、これが主として『リーन्हルトとゲルトルート』を教育の“ロマン”にしたのだということもよいでしょうね。

完訳までに十二年間 — 副題は『酔人の妻』 —

児玉 また先生は、『リーンハルトとゲルトルート』の副題として、『酔人の妻』という久保天随^(*14)の抄訳本の題名をご使用なさっています。私が思いますのに、この題は本文の内容と表裏一体となっており、昔の方は文才に秀でた方が多かったのだと感心しております。先生が副題を『酔人の妻』となされたわけには、何か背景があるのでしょうか。

田尾 『酔人の妻』という題名は大分古いので、私は必ずしも全面的に賛成であったわけではないのですが、小原先生がきわめて強く希望されましたのでそうなったのです。

小原先生は、京大で小西先生について勉強されたのですが、その頃から小原先生は『酔人の妻』という題が——いま児玉先生がおっしゃったように、内容と合致していますので——大変気に入っておられたのだと思います。

児玉 続いて、先生がこの本を翻訳するにあたってご苦労なされたことも何かお聞かせいただけますでしょうか。

田尾 そうですね、慣れないせいもあってか、第一巻で最も苦労しました。着手したのは、昭和二十七年頃ですが、当時いろいろな仕事で多忙であったせいもありまして、完訳するまでに十二年前後かかってしまいました。芸大から明星大学にまいります前後に完成したわけです。

これは余談ですが、当時、夏休みに入りますと、群馬県の嬭恋村の近くにある鹿沢温泉に行きまして、そこで翻訳をしたのです。何分にも甘いものが少ない頃でしたので、近くの牧場でとれる牛乳を楽しみにして仕事をしました。そんな思い出もあります。

児玉 つぎにひとつ、先生が、第一巻から第四巻までを完訳なさって、そこから得たこの本の理解の仕方を教えてくださいいただけますか。

田尾 ご存知のように、第一巻はフンメルのこと書いてありますが、彼の悪代官ぶりが少し強く出すぎています。まあ物語りとしては、これが面白い要素となっていますが、ペスタロッチ自身は、そう読まれることを望まず、民衆の生活記録として記述しています。第二巻は家内工業と、それに従事するゲルトルートがペスタロッチの理想の女性として、いきいきと表われています。第三巻では、代官フンメルの救済と、ゲルトルート風の教育をする新学校の設立が扱われており、第四巻では、ボナール村の諸問題の解決、国家の立場から指導する教育のあり方が書かれています。

一巻から四巻を通して、私は第四巻は重要であると考えていますね。といいますのは、教育を哲学的に反省してみ、特にプラトンの『国家論』^(*15)を参考に考えますと、教育には、プラトンのような考え方をしなければならない重要な面があると思います。それが第四巻で扱われているからです。

現代を解くひとつの鍵 — ドイツの伝統をくむ理念 —

児玉 私も、先程申しましたようにペスタロッチの研究に携わるものですが、『リーンハルトとゲルトルート』にある教育上の諸問題を深く理解して、今後の教育に生かさねばならないと日頃から思っております。この機会に、田尾先生から教育の理念を考える上で、これこそ重要であろうとお考えになっておられることをお聞かせ願えればと思うのですが。

田尾 先程、児玉先生もおっしゃいましたように、私は東京芸術大学で戦後、十数年にわたって教育学の講義をしましたが、戦後のアメリカ的民主主義による教育の問題をとらえるためにも、主として、デューイの教育論^(*16)を講義しました。そこでデューイを読むにあたって、理解を深めるためには、ラッセル^(*17)を参考にしました。といいますのは、デューイとラッセルは日頃、大変よく文通をしていて、デューイが新しい論文を発表すると、ラッセルはそれについての意見を求めていたようなわけがあるからです。それによると、ラッセルは大抵の場合、デューイの

考えに原則的に賛成しておりますが、一つの疑問点を絶えずデューイに伝えている。

ご承知のように、デューイの考えの根底には、コミュニケーションの重要性の認識があるわけですが、それが過度に強調されますと、必然的に個人の人格の形成に問題を生じることになります。

そこでラッセルは、デューイの意見では確かに社会的連関はよくなるが、個人の人格の完成は背後に押しやられてしまうといっているわけです。

私もこのラッセルの考えに原則的に賛成です。もちろん、社会性ということは必要ですが、個人の義務と責任に対する指導や教育がおろそかになります。ですから、私は講義の中心をデューイによりながらも、常にドイツの教育学の立場から反省を加えました。特にディルタイの考えなどを取り入れて、デューイのコミュニケーション論に、ドイツの精神的伝統である人格主義を取り入れてみようという努力もしてみました。

それでも現在の教育を考えてみますと、あまりにもアメリカ的な、機械的生産主義に傾いていますので——アメリカの機械的生産主義は、公害問題に見られるように多くの問題点を抱えています。それで私は、今日こそペスタロッチ的な教育を考えることが必要であると思っています。

児玉 そうしますと、先生のお考えをおし広めていきますと、当然教員養成の問題にも入ると思いますが。

田尾 そういうことになりましょうね。その点につきましては、私も現在は特にペスタロッチの教育思想、精神が大切なのではないかと考えております。ペスタロッチの精神などを中心にして、良い先生を養成することを考えねばなりません。この問題に関係しておられる鯨坂先生などに、私は期待しています。

ペスタロッチの信念 — 教育とは人間の救済 —

田尾 教育者としてのペスタロッチについて考えてみますと、彼は、きわめて異色ですね、つまり、小説を書いたり、自分の柩の前で異常な講演をしたり、ノイホーフの貧民学校^(*18)では、普通では予想できないような経営をする。ペスタロッチには常識的には、欠陥的と思われる面があります。しかし、よくみると、彼の欠陥は、実に神的な傾向をもっていることがわかるのですね。小西先生が言われた「ペスタロッチは神にして人、人にして神、彼は神と人をつなぐ神人であった」という言葉は、彼の行為が人間わざではないということを適切にあらわしていると思います。ペスタロッチを理解するには、その点からも理解すべきではないでしょうか。

貧しい人の救済に全ての情熱を傾けたペスタロッチは、彼の信念として、教育は救済であると確信していました。一般的に、教育の仕事に携わる人は、自己の仕事が救済の仕事であると考えなければなりません。

児玉 今、先生がおっしゃいましたが、常々私も教育の仕事とは人間の救済ではないかと考えておりました……。

田尾 ペスタロッチはそれを常に感じていたのですね。それが彼に普通の人間ではないようなことをさせたのではないのでしょうか。まあ、柩の前の講演はそのよい例だと思います。

児玉 ペスタロッチに対する当時の人びとの非難は私も理解できないわけではないのですが……。あれほど徹底して、恵まれない子供達に対する救済の手を差し伸べたのは、救済者として、彼は何物をも恐れなかったからではないかと思っています。それがさらに、自分を教育者、すなわち救済者として徹底させていったからだだと思いますね。

教育の本質はふれ合いから — 望まれる積極的なペスタロッチ研究 —

児玉 実際、ペスタロッチは人間的には非常な苦難の道を歩んだわけです。我われ普通人にとってみれば、たえず極限状態であろうと思われる日々を送っていたようですが、それでも救済者として自らの生を全うした。私、考えますには、そこから生まれた彼の教育精神を、今日実存哲学の立場からも、再検討する必要があるのではないかと思う

のです。

先生のご立派な完訳や研究は、後世に残ると思っております。が、さらにペスタロッチに対する研究、それに基づいた実践を私達は今後まだまだ続けなければならないと感じております。

田尾 そう思いますね。教育の実存とは、まさに教育の実践においてであり、教師と生徒が直接にふれ合うところに教育の Wesen（本質）があるのでしょうか。児玉九十学長が言われるヒューマン・タッチの教育とはそのことだと思われま。

児玉 この教育の本質をとらえて、これからも若い研究家の方がたが、現場の先生方をまじえて、かつて小西先生がおっしゃいました「汲めども尽きぬ泉」であるペスタロッチの教育精神を大事に育て、研究していきたいと思っております。

数年前、ボルノウ博士が本学で講演を行った時に、私は博士にドイツにおける研究の情勢はどうですかと尋ねたのですが、若い研究者は新しいものに追われて、生涯をかけてペスタロッチの研究をしようなどという者は極く僅かしかいないと博士も大変慨嘆しておられました。

田尾 近頃はどうもアメリカ的研究方法におされているわけですね。それが必ずしも悪いことではないのですが。このままでいると、これからますます社会的に困難が生じ、人間の生活がぐだけていくと思われま。

永遠の女性ゲルトルート — 母・妻そして教育者として —

児玉 先程、先生が母性愛と教育愛との関係について言及なされましたが、特にゲルトルートについてお話を伺いたいのですが。

田尾 第一巻ではゲルトルートが幼い子供達を大変巧みに扱い、教育することが描かれていますが、ゲルトルートの本質がもっともよくあらわれているのは第二巻でしょうね。

ゲルトルートの家で糸を紡ぐわけですが、糸繰りの娘たちを指導しながら、一方、ゲルトルートは自分の子どもの面倒もみる。それが非常に行き届いている。行き届いているというのは、それが特別に変わったことではなくて、母としては全くあたりまえのことなのです。いつも深い愛情に支えられた平常心をもって、冷静に指図し、指導しているということです。ですから、子どもや娘さんたちが彼女に、いわば清純な母らしい愛情を感じるのです。因みに、ペスタロッチの妻アンナ夫人は中年から病弱であったので、エリザベート・ネーフという婦人が、全く奉仕的に長年お手伝いとしてアンナ夫人^(ママ) (*19) を助け、貧しい家庭を支えました。このエリザベートがゲルトルートのモデルになったのだといわれています。

これは比較ですけれど、ゲーテの『ファウスト』 (*20) のおしまいにある「永遠の女性」とは何であるか、よく文学の上で問題にされます。いろいろな解釈があるわけですが、一般にはヨーロッパの人々の聖母マリアに対する崇拜——これは彼らの伝統的精神ですから——聖母マリアについての感想が、「永遠の女性」であると解釈されているようです。それとゲルトルートを比較してみますと、ペスタロッチにとっては、ゲルトルートは聖母マリアに類する永遠の女性ではないかと思われま。ペスタロッチの頭の中には、ゲルトルートは一種の永遠の女性として、すなわち、人間を指導してくれる女性としてあったのではないのでしょうか。

児玉 そうですね。ゲルトルートは母として、子どもに対する教育者であると同時に、本性は善良ではあるが、若干意志薄弱の夫であるリーンハルトをも、また人間全体を指導する「永遠の女性」でもあると考えられまね。

田尾 夫に対する指導、さらにはボナール村のいろいろな人びとへの指導をするゲルトルートは、単なる母親ではなく、広く社会的な、また人類的な豊かな拡がりを持つ教育者、救済者としてペスタロッチは描こうとしたのではないのでしょうか。

根元的存在としての女性 — その力は純粹であるところから —

児玉 一番大切なことは、母親というのは、知識や学歴があるか否かというのではなく、女性として子どもを育てる場合にも社会に接する場合にも、常に聡明であって、しかも真実なもの、善なるもののためには何ものも恐れないうことではないでしょうか。それは教育においても一つの大事なポイントでもあるように思いますが。

田尾 女性の最も本来の力を出せる根元は何かと考えたとき、純粹であることだと私は思います。ディルタイはこうっています。ペスタロッチは、根元的現象（Urphänomen）の人、即ち根元的な体験（Urerlebm^(ママ)is = Urerlebnis）をする人であること、つまり、根元的というのは、人間本来の、というほどのことで、大学を出たからとか、教養があるからというようなことではなく、誰でもが持っているもので、特に女性が本来的に持っている性質、子どもと一体となり得る性質なのでしょう。そういう性質が、ゲルトルートに与えられているのでしょう。

さらに付け加えますと、純粹ということは、自分の直覚的に感ずることに忠実であるということです。それをごまかさないうこと、簡単にいえば、正直であることです。そういうことを、人間はみな根底に持っているのだと思います。ただ、いろいろな事情でなかなか純粹に生きていくことがむずかしくなっているのですね。

しかし、私独自の考えですが、今日多くの思想とか、言葉とかをよく考えてみますと、みな何かのために、つまり、損得を勘定にいたした功利主義の立場から主張されているようです。しかし、人はそうではなくて、感じたことをそのまま表現することができるのではないかと思うのです。

先ほど申しあげましたディルタイのいう根元的ということは、実際みなが本来的にもっているのですが、何かに覆われて、かくれてしまっている。それをペスタロッチはそのまま表出しているということではないかと思うのです。そのような点から、ゲルトルートを把握すれば、彼女の本質を把握することができるのではないのでしょうか。

心に迫る教育を — 現代の課題 —

児玉 いま先生がディルタイの言葉を引用しておっしゃいました、根元的な人間、根元的な体験の女性といった、その根元的なものがペスタロッチにはあるのではないかと私も思います。

そういう体験から表出される言葉や思想は、必然的に、人間の本質に迫って、心を動かさずにはおかない何かがあると思うのです。教育の現場においては、その「何か」が絶対に必要だと思います。子どもを教育する場合に、子ども達の心に迫っていく、その「何か」が必要なのですが、現在のところ、それについて大変さびしい思いにかられているときがしばしばあります。

田尾 この頃は、社会が経済的にきびしくなっていており、それに応じて、人の言うことがますます功利的になって真実が語られませんか。真実をそのまま言うと人が嘲笑するという傾向さえあります。これは大変残念な傾向だと思いますが……。

児玉 昔の先生方の中には根元的な人間性をもって子どもに接し、彼らの心に迫っていく、現在と比べるとそういう先生がかなりいたのではないのでしょうか。

田尾 同感です。現代にもそのような教師が必要だと思いますね。

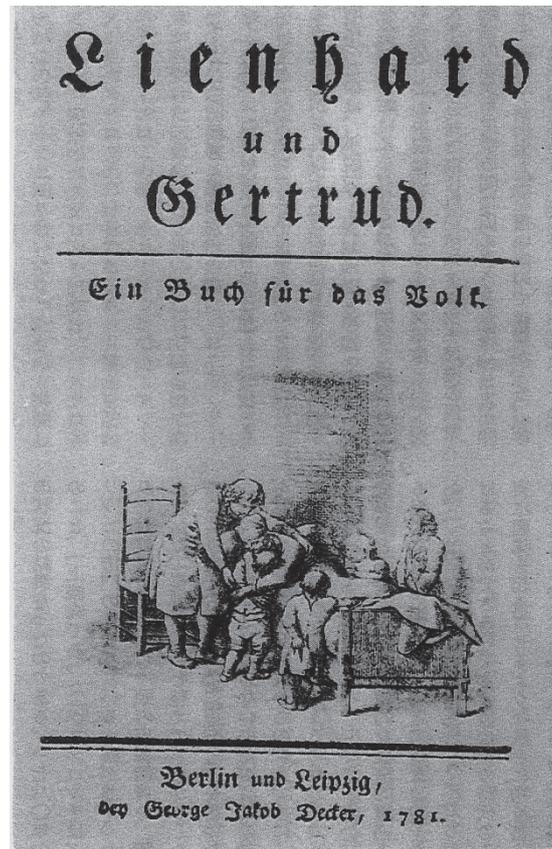
(昭和 51 年 明星時報No. 49 に掲載。)

【解題】

『児玉三夫対談集～教育の源流を求めて～』（明星大学出版部編 明星大学出版部 昭和62年11月発行）所収

「リーンハルトとゲルトルート～J・H・ペスタロッチのロマンをめぐって～」の解題

鯨井俊彦



ペスタロッチの小説『リーンハルトとゲルトルート』初版本（1781年刊）の表紙。
D.Chodwieckiの銅版画のさし絵が入っている。
（出典：M・リートケ著『ペスタロッチ』より）

目次

はじめに

1. ペスタロッチ著『リーンハルトとゲルトルート』（教育小説）の内容紹介と出版事情
 2. 田尾先生ご自身による『リーンハルトとゲルトルート』の解題
 3. 「対談集」への注釈 no.1~20.
 4. 『リーンハルトとゲルトルート』に現われているペスタロッチの根本思想について
- おわりに

はじめに

田尾一一先生によるペスタロッチー著『リーンハルトとゲルトルート』の翻訳書の第一部が『酔人の妻』という書名で出版されたのは戦後の昭和25(1951)年でした。以来、全四部作の完全訳が完成して出版されたのは、昭和39(1964)年7月のことである。第一部『酔人の妻』出版から数えて十余年を経て訳了されて完成されたものである。訳者の田尾先生はその間の理由を「校務が多忙になり、夏季休暇を利用する以外、手をつけることができないでいた。それが昨秋来、多少の余暇を得て、継続することができ、このたび訳了することができた。」と訳者序文で述べておられる。(昭和39年6月17日の日付あり)

1. ペスタロッチー著『リーンハルトとゲルトルート』(教育小説)の内容紹介と出版事情

以下、この『リーンハルトとゲルトルート』(Lienhard und Gertrud)の梗概をまとめておきたい。

この書は、民衆小説(Volksroman)とも呼ばれるペスタロッチーの主著の一つといわれて当時評判の小説であった。初版第一部は、1781年にベルリンおよびライプツィヒで出版された。直接の執筆動機は、ヒューズリー、J.H.^(注1)に経済状況の改善のため書くことを勧められたからだといわれている。しかしこの著書の意図するところは、まずは民衆に対して、更には民衆を統治している支配階級に対して、どのようなことが原因で人間は墮落するのか、またどうすれば人間は墮落から救われるのか、といった問いを、文学的表現を通して説いていくことにあった。そのため物語は狭義の教育だけではなく、政治、経済、宗教など、民衆生活の改善のために必須な要素が欠かすことなく織り合わさって描かれている。書名ともなっているリーンハルトは農村ボンナルに住む石工として、また7人の子どもをもつ父親として物語に登場し、ゲルトルートは彼の賢明な妻である。

物語は、リーンハルトが悪代官フンメルの経営する居酒屋に誘われ借金を重ね、そのため生活に困窮しきったゲルトルートが、村の領主アーナーに訴えようとするところから始まる(このことから邦訳では『酔人の妻』とも訳された)。アーナーは村の荒廃を憂慮して、統治者としての立場から村の改革に乗り出す。エルンストは牧師としての立場から、ゲルトルートは家庭の母親の立場から一致協力する。第一部は、親ごころをもったアーナーの治め方、手本となるべきゲルトルートの居間での教育の仕方、またそれとは対照的に、村の荒廃も生々しく描写されている。

このように第一部では主人公リーンハルトの放逸怠惰な生活を描いている。彼の頹廢の原因は、これまで金銭を知らず、全く淳朴なこの村に、近代の貨幣経済の波が押し寄せ、人々が金もうけと享楽の味を知ったことによる。このような当時ヨーロッパ各地でおこった道徳的頹廢に、いち早く着目し、教育によってこれを改善しようとしたペスタロッチーの卓見は広くヨーロッパ全体に共感を呼びおこしたのである。

第二部においてペスタロッチーは、村の荒廃と百姓の貧乏がどこから来るかを観察し、その救済の方法を探求しようとする。そのため村人の道徳的頹廢と経済的困窮の原因を解明し、その救済の道を説いている。「心の正しい人は、人々に対して何でも自分の望むことを成し遂げ、人々を自分の思いどおりのところに導いていくものである」。このことから結論として、「人間というものは、他人によって作られるままのものになる」ということがでてくる。ペスタロッチーがここで主唱し、小説の牧師にフンメルの例を使って何頁にもわたり説明させているのは、正に純粋な環境教育学なのである。

第二部は1783年に出版された。ここでは腐敗がおよそ村全体にまで広がっていることが示され、悪人たちの処罰と、道徳的な墮落の原因が語られていく。第二部でも実践的な能力と結びついた信仰心の重要性が説かれている。教育的には居間に焦点が当てられ、勤勉さと学習との結びつきに重点が置かれている。

第三部においてリーンハルトの妻ゲルトルートとそれに刺激された人々による事態改善を述べている。ペスタ

ロッチャーによれば環境をはなれた個人は存在せず、個人の陶冶は環境においてのみ行われ、また逆に環境の改善は個人の向上によってのみ遂げられる。「環境が人をつくり、人が環境をつくる」というペスタロッチャーの根本思想がここによく表現されている。最も重要な方策は、土地の分割、貯金の奨励、および学校の設立である。いま、酔人リーンハルトの墮落の背後には、悪代官であり居酒屋の主人でもあるフンメルを中心とする全村の荒廃があり、これに対して酔人の妻ゲルトルートの奮起は、良く一家を改造し、一村を改造し、ついに一国の道徳的改造の原動力となり得たことを述べている。更にまた教育の淵源は家庭にあり、その家庭の中心たる母の愛こそが、その根本であることをペスタロッチャーは説いている。彼はこの見地から、人の子の母たる者が教育の重責を自覚し、また全ての教育者が母性愛を体現し、児童の学校生活を家庭化すべきことを力説している。この部分においては、新教育の原理ばかりでなく、その方法も探求されている。一種の実学教育思想であり、また知育と労作とを結合する労作教育思想の片鱗も、すでにここに窺える。

第四部において、教育による改善ばかりでなく、政治の改革による村の改造についても言及している。そしてゲルトルートの始めた教育による道徳的改善の努力は、遂に一国の政治に一つの希望をもたらし得るであろうという事を最後に暗示している。

第三部は1785年、第四部は1787年に出版された。それは、村の本格的な改革を描き出している。物語の中で、アーナー、牧師、ゲルトルートに加えて、木綿屋マイヤー、退役した少尉グリュウフィーの支援が目立ってくる。特にグリュウフィーは、ペスタロッチャー自身の代弁者とも見ることができ、ボンネル村の学校を、ゲルトルートの居間をモデルとして運営していく。第三部からは学校も重視され、そこでは職業教育を通じての人間教育が遂行され、生活習慣の形成にも重点が置かれている。

他方アーナーは、法律の制定、起訴手続きの改善等を行い、村の経済も記録簿の採用により向上していく。貴族の妨害を乗り越え、結局村の改革は実を結んでいく。国務大臣ビリフスキーがボンネル村を訪れ、公爵に好意的な報告をし、村はより大きな国のモデルとして示されるようになり、この物語の第4部が終わる。

後にペスタロッチャーはこの4部構成の第1版を簡潔にするために、改訂に踏み切った。第2版は1790~92年に3部構成で出版された。この版は、ウィーンの宮廷に紹介されることを期待していた。また更にペスタロッチャーは『全集』の一部として本書を出版する際に、もう一度改訂を加えた(1816~26年)これがコッタ版『全集』の第一巻~第四巻である。この第3版では再び4部構成となり、実際は第六部まで予定されていたが、第五、六部については出版には至らなかった。

第3版の特徴として、物語の中では、貴族への配慮がみられるとともに、民衆自身からの改革が目立つことがあげられる。村では領主や牧師とともに、村の有能な者たちの統治集会が開かれる。そして村の中での民衆自身の教育にいつそう重点が置かれるようになる。ちょうど第1版が『隠者の夕暮』の思想の具体的な描写であるとするれば、第3版は『白鳥の歌』に対応するともいわれている。生活の中での人間諸力の調和的発展に目が向けられている。学校の成果も、子どもを通じて家庭に還元されることが期待されていく。

本書は、どの版にあっても、ペスタロッチャーの思想が包括的に、しかも実際の姿として描かれている。

注1・ヒュースリ (Füssli, Johann Heinrich, 1741~1825)

ヒュースリはペスタロッチャーの青年時代の友であり、その彼がペスタロッチャーの文筆家としての能力を絶望的な経済的境遇を改善するために有効に使うようにとペスタロッチャーを励ました。『リーンハルトとゲルトルート』はテーマとしては長い間準備されていたのであるが、ペスタロッチャーはそれをヒュースリの激励のおかげで初めて彼の貧民のための書物にぴったりの様式に結びつけることができたのである。ヒュースリは後にイギリスで画家として広く知られた。

2. 田尾先生ご自身による『リーन्हルトとゲルトルート』の解題

(ペスタロッチ著 田尾一訳『リーन्हルトとゲルトルート』玉川大学出版部 昭和55年(第15刷)555-556頁よりの要約。原文のまま。)

『リーन्हルトとゲルトルート』は1781年にその第一部が出版された。その事情は『白鳥の歌』や、イーゼリンへの手紙に、詳しく書かれている。その頃、ペスタロッチは、ノイホーフの経営が意の如くならず、生活に窮迫していた。それに同情した親友のヒュスリは、彼にしきりに書くことをすすめた。ペスタロッチは、ヒュスリから提供されたマルノントルの『童話集』を見て、それに類したものを書いた。それが『リーन्हルトとゲルトルート』である。『白鳥の歌』には「この物語は何の構想も頭脳も持たず、そういうものを考えてみることもなしに、どうしてか知らないが、自然と私のペンが流れ出て、発展して行った。その書物は数週間で出来上がった。私はどうしてそれが出来上がったか、さっぱり解らなかつた。私はその価値を感じた——しかしただ夢の中の幸福の価値を眠りながら感じる人の如くに。私は私が目ざめているとはどうしても思えなかつた。でも、私の経済状態をこの道で改善し、それを耐え得るものとするのが可能であろうかという希望の微光が、私の心の中に起こりはじめた。」(辻幸三郎訳) ペスタロッチはその草稿を、かねてから信頼していたイーゼリンに見てもらった。イーゼリンは、綴字の間違いや文章の不備があるにも拘らず、この草稿の価値を認めた。(中略) ペスタロッチは、それまで窮迫に追われて、あまり文章を書いていなかった。そのため、その文章は、綴字の誤りと意味の不明なところが多かつた。しかもそれが、彼の直接的な経験によって得られた、独特な言葉とまじっているのである。それをイーゼリンは理解深く修正し、良いところを生かして、今日のようなものにしたのである。

『リーन्हルトとゲルトルート』は「民衆のための書」という題がつけられている。ペスタロッチの序文に明らかのように、この内容は、彼が民衆とともに生活して感じたことを、感じたままに書いたものであって、その意味から見れば、民衆から生まれた書物であるが、同時にそれは、民衆の生活をより良くするためにどうすればよいかを明らかにするのであるから、「民衆のための書」である。しかし面白いことは、ペスタロッチが、この書物の価値を、書いてしまってから後に、自分で気がついたことである。つまり、民衆の生活を写してみても、そこに人間教育の根本の問題が自分にもはっきりしてきたことである。それほど、ペスタロッチは民衆と共に生きていたのであり、描き出された問題は切実な新鮮な問題であり、しかもそれが、人間生活普遍の問題であったのである。

『リーन्हルトとゲルトルート』は、その第一部が1781年に出て、続いて第二部が1783年に、第三部が1785年に、第四部が1787年に出た。四部から成る独特の書物である。イーゼリンが「独特の書物」と言ったことは真に適評である。ペスタロッチが最も貧しい農民生活の中にはいりこんで、そこで得られた経験をそのままに記述したものであって、文体は聖書のそれ類している。

第一部は見方によれば、悪代官フムメルの悪行と没落が経となり、劇的に始まり、劇的に終わるので、どうかすると読者は、地方の小役人の専横のみが、民衆の不幸の原因であるかの如く理解されないでもない。事実、第一部が出版された当時の一般の反応には、その傾向が著しかった。

ペスタロッチはその一面的な理解を修正したかったので、この書物の解説書を書いた。それが『クリストフとエルゼ』であり、『子供部屋の子供の教え』である。前のものは両親のためのものであり、クリストフとエルゼと言う百姓夫婦が、『リーन्हルトとゲルトルート』を、毎夜一節ずつ読んで、読んだことを語りあって行くうちに理解されるようになっていく。後のものは、問答して行くうちに、この物語の教えが子供たちに理解されるようにしてある。しかし、これらの書物はあまり読まれなかつた。勿論、そればかりが理由ではなく、ペスタロッチは、更に村の荒廃の原因を追及して、民衆を幸福にするための観察と方法を明らかにしようとした。それが第二部以下が書きついで行かれた事情である。

3. 注釈

* 1・モルフ (Morf, Heinrich. 1818~99)

『ペスタロッチー伝』(全4巻)の著者として特に有名。ペスタロッチーの思想を基礎とする教育実践家でもある。1846年にはペスタロッチー生誕100年の祝賀講演を行う。この講演のための事前の研究が、彼をペスタロッチー研究へ本格的に導くきっかけになったという。第1巻は1868年、第2巻と第3巻は85年、第4巻は89年に出版される。これら全4巻は、資料収集に対するモルフの情熱、技術、そして勘のおかげで、ペスタロッチーの生涯と事業とに関する極めて豊富な文献・資料を生かしたものとなり、ペスタロッチーに対して当時広まっていた偏見、曲解を、説得力を持って一掃することに役立つ。また彼はザイファルト、L. W. が全集を編集するとき、貴重な助言をし、文献を提供したとも伝えられている。

* 2・ルソー『エミール』(Rousseau, Jean-Jacques 1712~78)

18世紀における最大の教育思想家ルソーの主著『エミール』は1762年に出版された。その教育論は大別して身体の教育、感情・道徳の教育、知識教育、宗教教育、政治教育に分かれるが、それらは成長の5つの時期に配分されている。彼によると、人間は神によって創造されたままの状態におかれ生まれた時は善であるが、社会に入ったのち墮落するとする。こうして、①教育において徹底した自然主義をとり、②子どもの自然性を社会の悪影響から守る意味の消極教育を主張し、③自由と自発活動による教育を強調し、④実物教育と経験による教育の重要性を説いた。ペスタロッチーはこのルソーの自然主義の影響を強く受けており、教育の起動力は外部からの刺激や圧力ではなくて、自然の本性そのものであると主張している。そして、ペスタロッチーは人間の諸能力を開発し、自尊心や安定感を高めることによって、社会の改造が可能であると信じている。ペスタロッチーのこのような教育理論が『リーンハルトとゲルトルート』(1781~1787年)や『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』(1801年)などに示されている。

* 3・小西重直 (こにし・しげなお 1875~1948)

日本における教育学研究の先駆者の一人。広島高等師範学校教授。京都大学教授。京都大学総長。

『小西博士全集』全5巻(1935年)の中で、ペスタロッチーないしルソーに関する主な論述には「ルソーとペスタロッチー」(『教育の本質観』3巻)、「ペスタロッチーと労作教育」(『労作教育』第3巻)、「ペスタロッチーの人格とその思想」(『教育思想研究』5巻)などがある。

* 4・長田新 (おさだ・あらた 1887~1961)

広島文理科大学学長。ペスタロッチー研究者。1910年広島高師英語科卒業、大分師範で教鞭をとった後、12年京都大学文学部哲学科に進み教育学を専攻、小西重直に薫陶を受ける。15年大学卒業後、上京して沢柳政太郎の秘書となり、教育学研究に従事。1917年沢柳による成城小学校の創設、経営に参加し実証の実験研究を行って新教育運動を展開した。1919年に広島高師に赴任、翌20年ペスタロッチー運動を広島の地で起こした。28年ドイツのライプツィヒ大学に留学、リット、T.のもとで教育哲学を研究。ペスタロッチーに関する長田の主な研究業績としては、『ナトルブにおけるペスタロッチーの新生』(1925年)、『ペスタロッチーの教育思想』(1927年)、『ペスタロッチー教育学』(1934年)、『ペスタロッチー』(1936年)、モルフ『ペスタロッチー伝』全5巻の翻訳(1939~41年)、『ペスタロッチー伝』(上・下、岩波書店 1951~1952年)、『ペスタロッチー全集』(全13巻、平凡社、1961年)の邦訳と編集校閲がある。

* 5・成城学園

東京の世田谷区成城にある成城小学校は個性尊重教育のための実験学校として、1917年(大正6)沢柳政太郎によって創設された学校である。創設当初から新教育の実験校として教育革新運動の中心地になる。この学校では、教育を観察、実験、統計に基づいて実証的な観点から行おうとする実験教育学の立場から、(1)調和ある人格養成の教育、(2)個性尊重の教育、(3)自学自律の教育、(4)学的根拠に立脚して教育、(5)能率高い教育、(6)自然尊重の教育、(7)

師弟間の温情、を教育信条に運営された。

新教育の実験学校としての成城小学校の特色は次の3点が挙げられる。

第一に、パークースト、H. のドルトン・プラン（注6参照）に共通した学習形態に特色がある。それは、自由と協同を根本原理にし、従来の一斉授業形式にとらわれず、子どもの自主的学習を重視していた。子どもは自分で予定表を作成し、好きな時に個々の能力に適した学科を能率的に選択する授業方針で進められた。第二に、全人教育があげられる。ペスタロッチーの主張した調和のある人間を理想とし、学問・道徳・芸術・宗教・身体・生活の分野において、真・善・美・聖・健・富の価値を求めたのである。第三に、労作教育を特色とする。これはペスタロッチー流の「頭」の教育だけではなく、「手」の教育を重んずる教育である。

* 6・パークースト女史 (Parkhurst, Helen. 1887~1973)

アメリカの女流教育家。ドルトン・プラン (Dolton Plan) の創案者。

このドルトン・プランは、小学校やハイスクールの教師として働くなかで、年齢も能力も、関心も異なる子どもたちを、彼女一人で指導するという課題に直面したことに始まる。彼女は、生徒を学習の主体としてとらえ、生徒とともに研究していくことの大切さを認識した。それが、個別教授法の研究のきっかけになり、生徒の自主性と個性を重んじた教授法・学校組織（ドルトン・プラン後述）を全面的に実施になった。そして、初等教育段階でも、ドルトン・プランによる学校改造を試みた。彼女は1924年以來1939年まで4回来日している。ドルトン・プランとはアメリカのマサチューセッツ州ドルトンの町のハイ・スルードで1920年、パークーストにより実施されたもので、プランの名称は地名による。正しくはドルトン実験室案 Dalton Laboratory Plan といわれる。

学校全体が社会 (Community) のようなはたらきをすることができるように改造し、それが社会生活と同一原理の下に運営されることを望む。そこで、その社会の基本的条件は各人が自らを発達させる自由 (Freedom) をもつこととし、これを第一の原理とし、また真の社会生活は接触以上のもので、それは協同 (Co-operation) であり、相互作用 (Interaction) であるとして、これを第二の原理とした。これらの学校生活の社会化とそれに基づく二つの原理によりその実際案が生まれてくる。このプランでは社会生活において仕事を中心になるように、学習は生徒の自主的な仕事として行われ、教師は主にそのアドバイザー、学校は生徒の人間形成のための共同体となる。

このプランは、わが国では、1921 (大正10) 年、沢柳政太郎・小西重直・長田新一の一行、および吉田惟孝の海外視察、さらには1922年の吉田の視察報告の出版や成城の赤井米吉の関係図書の翻訳等により本格的に紹介された。そして翌年にはその試行期で、1924 (大正13) 年にパークーストの来日もあって本格的実践期に移っている。そして当時の自由教育思潮に支えられて、成城学園以下多くの実践校が生まれた。

* 7・オスウェーゴ運動 (Oswego Movement)

アメリカニューヨーク州のオスウィーゴ州立師範学校を中心として展開されたペスタロッチー教育運動。その主唱者はシェルドン、E.A である。オスウィーゴ市の教育長シェルドンは、1859年カナダのトロントで長年渴望していた教具に接し、それらの教具を用いて管内の学校の改善をはかろうとした。しかし多くの障害に遭遇、その解決策として61年、市立教員養成学校を設立、学校長にペスタロッチー主義者メイヨー、E. の指導を受けたジョーンズ、M.E.M をロンドンから招聘し、ペスタロッチー主義に基づく実物教授をもって旧教育の刷新に努めた。

オスウェーゴの教師教育は、アメリカ国内のみならず諸外国にまで波及した。日本では高嶺秀夫が同校を卒業して実物教授を伝え、津田梅子も同校に聴講生として入学した。

オスウェーゴ運動は後年、ヘルバルト主義が導入されるまでのおよそ四半世紀にわたって、教育界に革新的な成果を残した。たとえば、小学校における教材、教育方法、教育精神の変革を齎したし、各地の師範学校の教授法を刷新し、教育実習を教師教育にとって欠くべからざる条件としたり、実物教授を普及したりした。

*** 8・福島政雄（ふくしま・まさお 1889~1976）**

教育学者。1920年広島高等師範学校に赴任し、1929年広島理科大学の創設を経て、教授として長田新とともに同学校および同大学教育学研究室の指導の任にあたり、全国的なペスタロッチー運動を展開した。この間、福島はペスタロッチーの『隠者の夕暮』や『探究』に示された教育思想の深い意味を解明した。

*** 9・高嶺秀夫（たかみね・ひでお 1854~1910）**

明治期の最も傑出した教育学者の一人。高嶺は、1875年（明治8）、文部省より師範学科取調の命を受けてアメリカに留学し、当時アメリカのペスタロッチー主義運動の濫觴ともいわれたニューヨーク州オスウィーゴ師範学校においてペスタロッチー主義に基づく新教授法を学んだ。78年に帰国、直ちに東京師範学校に勤務、81年には同校校長になり、教授法改革を行った。

*** 10・阿部次郎『三太郎の日記』**

阿部次郎（1883~1959）は明治から昭和時代にかけての哲学者。夏目漱石の門に入り、森田草平、小宮豊隆らと親交を結んだ。大正3年に『三太郎の日記』を出版した。これは多感な自我の内面的な彷徨と反省を日記体で記録したもので、新しい哲学的人生論の書として青年知識層に歓迎され、広く読まれた。阿部は個人の内面的個性を重んずる理想主義的な立場から、多面的な著作活動を展開し、大正期の教養主義・人格主義の思潮を代表する人物の一人と目されるようになった。東北大学では美学を講じた。

*** 11・西晋一郎（にし・しんいちろう 1873~1943）**

大正・昭和時代の倫理学者。明治35年広島高等師範学校教授となり、昭和4年広島文理科大学教授となる。初めT.H. グリーンの倫理思想を研究し、明治35年邦訳書『グリーン氏倫理学』を刊行した。その後、次第に東洋の伝統的倫理思想への関心を強め、『倫理学の根本問題』『実践哲学概論』などにおいて独自の倫理学思想を展開した。（日本近現代人名辞典 吉川弘文館 2001年より）

*** 12・ディルタイ（Dilthey, Wilhelm. 1833~1911）**

ドイツの哲学者。18,19世紀のドイツ精神史の重要な時期について研究し、精神科学の新たな方法論的基礎付けを試みた。この試みの究極の目的は人間（性）の研究であった。この研究の対象は、哲学・文学・芸術・宗教・法律・政治・経済・国家・倫理・習俗・家庭・社会等および人間の精神の所産とみられる全文化領域にわたっていた。彼はそれらを互いに連関し合って存在しているものとみて、それらを「全体」という相の下に「連関」している個々の環とみたのである。彼はこの環の連関の複雑な絡み合いを一つ一つほぐしながら、しかも全体としての生ける相を壊さずに捉えようと試みた。そして、彼は教育学も精神科学とみなし、意識連関の体験的明証からその学的妥当性を導き出した。この考えは精神科学の各領域の代表者によって発展された。教育学の領域で言えば、リット、ノール、フリットナー、ボルノウらによって受け継がれている。

*** 13・フンボルト（Humboldt, Wilhelm von. 1767~1835）**

ドイツの新人文主義の思想家、外交官、政治家、言語学者。プロイセン教育改革期の宗務・公教育局の初代長官（1809.2~10.6）として、ベルリン大学創設（1810）、ギムナジウム改革、ペスタロッチーのメトーデ導入による初等教育と教員養成制度改革など教育改革の基礎を形成、特に一般的人間陶冶と統一的な学校制度の理念を後世に残した。

*** 14・久保天随『酔人の妻』（くぼ・てんずい 1875~1934）**

久保天随は明治から昭和時代前期にかけての漢文学者。名は得二、のちに天随と号した。漢籍の注釈や評論・紀行に文名を馳せた。昭和4年台北帝国大学教授。昭和9年没。

*** 15・プラトン『国家論』**

プラトンのこの『国家論』のなかでは、じつにいろいろな問題が取り扱われている。たとえば〈教育〉の問題は、この対話篇において第二巻から第七巻までの大部分で扱われている。ソクラテスは〈正義〉の考察を、国家社会のモ

デルをつくる仕方どころみようとするのであるが、その最初は、人間の生存を保つための最小限必要限度を満たすだけの〈最も必要なものだけの国家〉をつくることではじめられる。それに対して、プラトンでは、たんに存在するだけの国家ではなく、〈より善き生〉を旨とする文明社会ないし文化国家が考えられるわけである。そして、本題として提出された問題は、われわれが生きていくうえにおいて、〈正義〉は〈幸福〉を約束するだろうかということである。われわれは、正直に生きていくだけで人間としての満足な生活ができるだろうかという問題だと言ってもよいだろう。プラトンは、この〈正義〉と〈善〉の結びつきを考えるのに、国家社会の理想状態というものを一種の思考実験のかたちで作りあげ、このモデルのなかに、〈正義〉がどのような役割をするかを見るという仕方、この問題に答えようとしている。

国家篇は、実際は都市という共同体を取り扱った著作として、普通われわれが倫理学の論文として知っているようなものとも同じではなく、むしろ、もっと具体性をもち、もっと包括的であって、経済や政治、家庭生活、宗教、教育、哲学、芸術、文学などの原則的な問題が論じられている。プラトンは、これらのすべてが一つの共同生活の構成要素として、この共同生活の枠内に結びあわされているところを見ていたのである。以上のことを含んだ上で、ペスタロッチーは『リーンハルトとゲルトルート』の第四部でその内容を展開していると考えられる。

* 16・デューイの教育論

デューイ (Dewey, John. 1859~1952)

アメリカにおけるプラグマティズムの代表的学者として、その活動は哲学・心理学・教育学・芸術論・社会思想・文明批評などの多方面にわたっている。デューイの教育理論の骨組みがすでに1890年代の半ばにかたちづくられたことは、簡潔にまとめられた『私の教育信条』(My Pedagogic Creed, 1897. 児玉三夫訳、これはデューイ著『経験と教育』付録所収、春秋社、1951年)によって示されている。この書から『学校と社会』(1899)へ、そしてそれ以後十数年にわたる教育の方面での彼の理論的業績は、すべて、教育学上の主著『民主主義と教育』(Democracy and Education, 1916. 松野安男訳、岩波書店、昭和50〔1975〕年)に流入している。

デューイは、すべての観念は行動のための道具であり、思考は人間と環境との相互作用、環境を統制する努力の中から生まれ、かつ進化すると説く道具主義の立場に立つとき、彼の関心はアメリカ社会の実際生活に向けられる。デューイは、哲学が自らを再建するためには、「哲学者の問題」を解くためのものたるをやめて、「多くの人々の問題」を解決するための哲学的方法となるべきことをも認め、職業的な哲学者ではない一般の人々が日常生活の中で出会うあれこれの問題を根本的に、原理的に解明する方法として哲学は再出発すべきであると説いている。

デューイによれば、学校は社会にすでに存在している欲求や目的に奉仕する技術的手段を青少年にあたえているのであって、社会的活動がそれによって選択され決定されることの根源である欲求自体、目的自体を形成することには、実はほとんどあずかかっていないのだとデューイはいう。人間の性向をかたちづくり、行動を方向づける、より深い、より根強い教育が、フォーマルな教育機関によってではなく、人間が四六時中そのなかに織りこまれている社会生活そのものによっておこなわれている。だから、社会そのものが教育的にならない限り、学校がいかに教育的活動につとめてもだめである、ともいう。

第二次世界大戦後、プラグマティズムとその教育理論、とくにデューイのそれは、占領下のわが国で大きな影響をもつことになった。いわゆる、日本の大学や教育学会などでデューイの教育理論の吟味が行われたのである。

* 17・ラッセル (Russell, Bertrand Arthur William. 1872~1970)

20世紀イギリスの最も重要な思想家の一人。彼の著作活動を含む公的生涯は4分の3世紀にもわたり、本領ともいべき数学基礎論、論理学、哲学はもとより、哲学史、社会思想、平和論、教育論、文明批評、啓蒙的科学書、人生論、エッセイなどの領域における多数の著書は世界各国の読者によって広く読まれ、20世紀の思想界に多大な影響を与えた。哲学者としてのラッセルについて言えば、ラッセルはベーコン、ロック、J. S. ミルと続いてきたイギリ

ス経験論の継承者であった。経験主義者としてのラッセルは自然・社会諸科学のほとんどあらゆる分野に対して終生関心を持ち続け、その広い学殖に基づいて、宇宙論的な視野のなかで人間およびその社会について思索した。彼の人間論の第一の特色は天文学的視野における人間の矮小さの強調であり、この見地から、かれは多くの思想家が不当に人間中心的世界観を唱えてきたことを批判する。彼によれば、この傾向が最もはなはだしいのはヘーゲルに代表されるドイツ観念論であるという。第二にラッセルはこの同じ人間がおのれの宇宙における位置と進化論的由来と冷厳に認識し、学問、芸術、道徳などの面で偉大な業績を成就してきたことを同時に力説し、ある重要な意味において人間が大宇宙のなかでやはり特別な位置を占めることを認めている。

その意味で、ラッセルは啓蒙合理主義、自由主義、民主主義、平和主義、国際連邦思想の20世紀における最大の代表者であったといえるだろう。

デューイとの関係で言えば、ラッセルは1938年、アメリカに移り、44年に帰国するまで、第二次世界大戦を含む約6年間のアメリカでの生活を送る。シカゴ大学、カリフォルニア大学（ロスアンゼルス校）での講義、演習を、またハーバード大学でも一連の講演を行う。1943年にはプリンストン大学に移ってアインシュタインとも親しくなる。在米中いくつかの本を書いたが、その中で最も重要なのは『西洋哲学史』（A History of Western Philosophy, 1945）である。このアメリカ滞在中にデューイとの文通がしばしば行われていたと思われる。

* 18・ノイホーフの貧民学校

ノイホーフとは、ペスタロッチーが1771年から98年まで農業経営者、貧児の教育実践者、文筆家として活動し、また、晩年、最後の2年間を過ごした土地。ペスタロッチーは農業経営者として職業活動の第一歩を踏み出したが、購入した土地が農地に適さなかったことや彼の経営能力の欠如のために、当初より困難を極め、1773年には破綻してしまう。これを契機に最初の教育実践、つまり産業革命をまのあたりにして零落した民衆の子どもを対象にする貧民学校の実践が始められる。この学校は、家庭的な雰囲気の中で貧児に自活に必要な生活技術を労働を通して身につけさせるとともに、新しい産業社会を生きるのに必須の知的・道徳的・宗教的能力の育成をはかることを目的とした一種の産業学校であった。この試みもまた、いくつかの深刻な理由によって事業継続のための資金調達がままならず、1780年にはついに中止せざるをえなくなる。ペスタロッチーはこの事業の失敗によって極度の経済的困難に直面しただけでなく、世間の信用も失うことになった。ノイホーフにおける文筆家としての活動は、こうした彼の人生における危機の時代に始められるのである。

* 19・アンナ夫人

アンナ（Anna, Pestalozzi Shulthess 1738~1815）ペスタロッチーの妻。1769年の結婚以来、1815年の死に至るまで、ペスタロッチーにふさわしい妻として、苦楽をともにした。美しく、裕福で、教養があり、有能な女性であった。アンナがペスタロッチーと知り合ったのは、彼女が30歳の時であった。親友ブルンチェリーの死をきっかけに2人の交際が始まった。アンナはペスタロッチーの善良な心情、偉大な精神、深い愛情を示す「大きな黒いまなこ」をたたえその天才を認めた。2人は1769年9月末日、ゲーベンスドルフの教会で結婚式をあげた。その後、1815年に死去するまでアンナはペスタロッチーを支え続けた。ノイホーフでの農場経営の失敗に際しては、精神的かつ経済的にペスタロッチーをささえた。ブルクドルフ、イヴェルドンでは学園の母として、教師たちの不和をなごませ、ペスタロッチーの最初の全集（これがコッタ版『全集』のことである）発行への希望を慰めに、1815年この世を去った。

墓碑には次のように刻まれている。

／・・・／貧民の友、／人民の保護者、／教育の改革者となる、／ペスタロッチーにふさわしい妻、／彼の献身的事業における46年間の／全面的な協力者、／彼女は、祝福された、／尊敬すべき記念を遺した。

* 20・ゲーテ（Goethe, Johann Wolfgang von. 1749~1832）

ドイツの詩人、作家。彼の教育思想はその多年の著作に散見される。例えば、『ファウスト』『親和力』など、特に

教育小説『ヴィルヘルム・マイスター』にみられる。しかし教育に関するまとまった理論は打ち出されていない。彼の仕事は究極的には、人間形成に向けられていたといえる。それはまた彼自身の形成と人類の形成でもあった。彼は詩人であると同時に教師であり、預言者であり、神と人類の友であった。ペスタロッチーとの関連で合えば、ゲーテの「手仕事（Handwerk）は一切の生活、一切の行為、一切の技術の根底をなす」という言葉（『遍歴時代』の「教育州」）は、彼の考える教育の理想像を示しており、家庭的結合を重視しつつ児童の個性を顧慮して即物的、道徳的、宗教的な教育を行なうべきであるという彼の思想と実践は、ペスタロッチーに通ずるものがあり、それは、ドイツのみならず、世界の新教育運動に大きな影響を与えたといえる。

*ゲーテの『ファウスト』に述べられる永遠の女性

永遠の女性とは、ゲーテの『ファウスト』の第2部・第5幕の最終の場面に出てくる2行の言葉「永遠の女性が、高い空へ／われわれを導く。」のこと。この部分に関する解釈は色々なされてきた。

ある人は「最後の2行に歌われた、永遠の女性の賛美は、神秘的な合唱からいえば、栄光の聖母の讃美である。しかし、ゲーテからいえば、『ファウスト』全曲と80年のかれの人生に関係づけて、地上の女性のうちに啓示される「永遠なもの」の讃美である。そして、聖母とは、どこまでも高く、清らかな天へ昇ってゆくこと。成長し変化しながら、新しい生へむくこと。先導するものと、追従するものと、導くものと。導かれるものと、教えるものと、教えられるものと、聖母はそれをやさしく教示する。ファウストが救済するに足るものかどうか、いささか疑問である。しかし、ファウストは救われた。かれの救済は、神の恩寵にほかならぬ。」と。（大山定一訳「ファウスト」『ゲーテ』〈世界文学大系19 筑摩書房 1960年 298~299ページより〉）

4. 『リーन्हルトとゲルトルート』に現われているペスタロッチーの根本思想について

ペスタロッチーは1781年に『リーन्हルトとゲルトルート』の第一部を出版するにあたって彼に大きな影響を与えた人としてイーゼリンを挙げている。その前年の『隠者の夕暮』を公刊できたこと、また、この『リーन्हルトとゲルトルート』の第一部を公刊できたことと併せて、イーゼリンの助言と援助があったことを『白鳥の歌』の中で回想している。イーゼリンのおかげで『隠者の夕暮』（1780年）を公刊できたことで、そして更に、彼が自信を強める上で決定的だったのは、小説『リーन्हルトとゲルトルート』を公刊する際にイーゼリンが与えた助言と援助であったという。この小説はペスタロッチーに文筆家としての大きな成果をもたらした。「この著作がイーゼリンに与えた印象は、まったく格別なものでした」とペスタロッチーは『白鳥の歌』の中で回想している。『白鳥の歌』の叙述によれば、『リーन्हルトとゲルトルート』を書くことで、貧民教育の理念を普及させる役割を果たすような「民衆のための書物」を著すという思想をもっていた。こうした構想を彼はすでに1778年5月に『エフェメルデン』誌で公にしていた。その書物はペスタロッチーの貧民施設の基盤をなす意図と合致すべきものであった。ペスタロッチーはそれをヒュスリの激励のおかげで初めて、彼の貧民のための書物にとってぴったりの様式に結びつけることができたのだ、ということができるだろう。

その様式が発見されるや、かつてからの思想は難なく芸術家的な見事さで、目に見える形で現われてきたのである。それがリーन्हルトとゲルトルートおよびボンナル村の物語となったのである。「ボンナル村にひとりの石屋がすんでいた。彼の名前はリーन्हルトで、その妻はゲルトルートといった。彼には7人の子どもがあり、稼ぎもよかった。——ところがリーन्हルトには、しばしば居酒屋でついつい人の誘惑に陥ってしまうという欠点があった。彼は居酒屋で腰掛けているときには、まるで常軌を逸した人間のように振舞うのであった。——そしてわたしたちの村には、正直者やお人好しを待ち伏せて、あらゆる機会をとらえては彼の財布から金をせしめることに奔走し、それで生活しているような抜け目のない、悪賢い連中がいる。・・・ゲルトルートは村一番の優れた婦人である。——ところがゲ

ルトルートも、リーンハルトが酒を止めることができなかつたために、父親と住まいのあばら家とを奪い取られ、別れ別れにさせられ、いじめられてこの上なくひどい悲惨な状態に陥れるという危険に晒されていた。」(リートケ著『ペスタロッツ』105-106頁)その後、ほどなくこの家庭の不幸のもともとの原因は、公職と同時に居酒屋の経営権をもっている村の代官フンメルにあることが判明する。リーンハルトはこう告白をする。「・・・わしは代官のフンメルにまだ借金がある。わしがあいつのところ立ち寄らないでいけば、借金返済を迫る訴訟をたてに脅かしてくる。——わしが立ち寄れば、わしの汗と労働で得た賃金をはすべてあいつの手に渡ってしまう。—— ゲルトルート、これがわしらの不幸の源なのだ。」そこで、ゲルトルートは、意を決して、この苦境からの逃げ道は「国父であるアーナー」に、フンメルに対する方策と防護を頼む以外にないと考え、ゲルトルートはアーナーに会いに出かけていく。そして、彼女は、アーナーが彼女のあらゆる苦悩に同情をもって耳を傾け、援助を惜しまないこと、とりわけ彼自身もフンメルに対して同じような疑惑を抱いていたということを知るのである。アーナーは、フンメルのあらゆる悪い術策の中に、大量のいかさまと脅迫が含まれていることを証明し、代官フンメルを処罰することに成功する。最後は、ボンナル村の牧師の協力を得て領主アーナーは、フンメルとその一味が村にもたらしていた苦悩を大々的に取り除き、村の社会的、道徳的改善のための新しい基礎をすえることができる(同上書・106-107頁)というストーリーである。

このようにこの小説の筋の運びは、非常に単純である。会話文はあっさりしていて、時より子どもっぽいに素朴である。挿し絵は印象的なものだが、しばしばしつこいほど牧歌的で哀れっぽい。それにもかかわらず、この小説は1781年4月に刊行されたときわめて好評であった。1781年11月までに「チューリッヒとヴィンターツールだけでもほぼ400部売れた」という。さらに同じ年にこの本はフランス語に翻訳されてもいる。

この小説のために、ペスタロッツは全ヨーロッパ的な名声を得て、それまでスイス国内で損なわれていた彼の声望を再び修復させることができたし、ベルンの経済協会からは、「最高の市民に」と刻まれた大きな記念メダルも贈られたりしたのである。

ここでペスタロッツがこの小説の中で読者層に訴えたこととは何か、彼が主張したかった根本的な思想について考察しておきたい。

ペスタロッツは「この本は、民衆に対して二、三の重要な真理を頭と心に浸透していくような具合に語ろうとする試みの、歴史的な基礎をなすものである」といっている。この書物が期待した読者層はなによりも田舎の民衆である。そして民衆は、家庭や村全体の深い苦悩がどうすれば個々の婦人のてきばきした賢明な先導によって克服されるのかを学ぶべきであるという。

このような考え方はどこから出てくるかといえば、それはペスタロッツの生活の中心となっている人間の本質と行動を得ようとする努力、それらに対する憂慮、そしてそれについての探求ということに関わっていることから出てきたものといえる。ペスタロッツは、彼の時代の政治的そして社会的諸関係について諸々の経験をしているし、同胞との波乱万丈の経験も積んでいる。とりわけ彼は長い年月にわたって苦しい運命に出会ったが、そうしたことが、彼の内に思想の成熟をもたらし、諸々の知識を語り出せるようにしたのである。ペスタロッツが認識するのは、自然に基づく人間の諸々の基底と素質である。彼は、彼独特の印象深い仕方、社会問題と人間の本質についての考えを、財産、所有、権力、そして自由の問題に関連させて述べている。その考えは、読者をくぎづけにし、よく考えるように仕向けている。しかしながら、ペスタロッツは、道徳的な人間存在の分析だけで満足するのではない。彼は、同時に、実現に値する教育的要求をわれわれに告白する。それは、人間の内に「善への力」が発達しうる可能性があるからである、という。

ここにペスタロッツの社会教育学とでもいえる観念が生じてきていることが見て取れる。1785年刊行の著書『リーンハルトとゲルトルート』の第三部はよく読まれているが、それに対する注釈の中にペスタロッツの覚書きが見出される。それは、人間の欲求と優柔不断に関するもの、策略と詐欺、誇り、放縦、悪人氣質、忘恩、快樂への

自然的傾向に関するもの、権力者の気ままと無責任、愚人を作る虚栄と自愛、当局の愚策、犯罪への衝動、窃盗、殺人、動物である人間の性癖に関するものである。それに続けて、人間の内的自由への可能性は自制することのみ存すると注釈している。そして1787年刊行の『リーンハルトとゲルトルート』の第四部において、いっそう陰鬱なものが現われ出したことは痛ましい。「もし人間が放任され野生のままに成長するならば、人間は・・・生まれつき怠惰で、無知で、無分別で、軽率で、思慮なく、だまされやすく、臆病で、果てしなく貪欲であり、さらに人間は、・・・邪に、狡猾、陰険に、暴力的に、厚顔に、執念深く、そして残忍になる。・・・これと同じく、生まれつきそのような人間は、・・・社会に対して何の役にも立たないばかりか、社会にとって極度に危険で堪えがたいということが真実である」（ロート著『ペスタロッチーの人間像』52頁）。上に挙げられているように、考えられる限りの性格特徴を得ようとした長いリスト、それは、なるほど人間の本質をなすものではないが、しかし本質的なものを十分に示している。つまり、人間は生まれつき善ではないという経験的事実がここに示されているのである。そして『探究』において人間が高貴化されていない自然存在として悪業を行うという確信を証明し、命のおわりに至るまでそのことを保持したということにあるからである。人間はどう言われようとも、高貴化されねばならないという思想がペスタロッチーの人間観であり、それが人間陶冶の永遠の課題でもあるという。

ペスタロッチーはこのことを「民衆のための書」として小説の形で訴えていると捉えたい。

おわりに

教育家であり、哲学者であり、政治家、社会改革家、文筆家、詩人でもあったペスタロッチー、18世紀中葉から19世紀初頭の激動の時代を生きたペスタロッチー、人類の救済者、教授法改革者としてのペスタロッチーなどと色々の修飾語で言われるペスタロッチー。彼の生涯は、多彩な活動をする中で政治思想や社会思想、教育思想・学説などを広く世に問うことで彩られている。

なかでもペスタロッチーの生涯の課題は、小説『リーンハルトとゲルトルート』の内容に示されているように、社会の底辺に沈み込んでいる農民や手工業者の家庭を、その泥沼から救いあげることであった。そのために彼は、農民や手工業者の子どもたちに、かれらが新しい商品経済の社会で生きるために必須の基礎学力をつけてやらなくてはならない、と考えていたのである。だから、彼の生涯の課題は、先にも述べたように、貧しさからの民衆の解放ということであった。そして、この目的に役立つ教育とは、具体的には、商品経済の支配する社会で生きるために人々が必要とする基礎学力、とりわけ読み、書き、計算の能力を、貧しい民衆の子供たちの身につけさせることであった。本文でも触れているが、『リーンハルトとゲルトルート』は『隠者の夕暮』と前後して書かれた教育小説であり、また『リーンハルトとゲルトルート』は『隠者の夕暮』で説かれた教育、政治、人間の問題を小説の形で扱っている、と捉えることができる。特にここに盛られた民衆教育構想は、具体的であり、ペスタロッチーの根本的姿勢をよくあらわしているといえる。その意味で、『リーンハルトとゲルトルート』出版のもつ影響は大きかったといえる。

引用文献・参考文献一覧

1. M. リートケ著 長尾十三二／福田弘訳『ペスタロッチ』理想社 1985年
2. H. ロート著 川村覚昭 下山田裕彦訳『ペスタロチーの人間像』玉川大学出版 1991年
3. W. クラフキー著 森川直訳『ペスタロチーのシュタンツだより —クラフキーの解釈付—』東信堂 1997年
4. 日本ペスタロチー・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロチー・フレーベル事典』玉川大学出版会 2006年
5. 世界大百科事典（改訂新版）平凡社 2007年
6. ヘルバルト著 是常正美監訳『ペスタロチーの直観のABCの理念』玉川大学出版 1982年
7. 稲富栄次郎著『ペスタロッチの生活と思想』福村出版 1971年
8. 大山定一訳「ファウスト」『ゲーテ』〈世界文学大系19〉筑摩書房 1960年